

報告 4：瀬戸 宏 (摂南大学)

社会主義リアリズム導入を巡って—人民共和国建国後を中心に

中国文学・芸術に対するロシア革命の影響は、『新青年』五巻五号(1918年11月)に李大釗が「Bolshevism 的勝利」を発表するなど、革命の直後から生じている。本報告では時間の制約もあり、総花的に中国文芸に対するロシア・ソ連の影響を概観するのではなく、社会主義文芸理論の核心である社会主義リアリズム導入とその影響の問題を中心にしたい。

中国での社会主義リアリズム導入も、ソ連で社会主義リアリズムが提唱された一九三〇年代以来の長い歴史があるが、今回は、中国共産党が政権党になり、中国共産党の理論が国家規模で影響力を持つようになった中華人民共和国建国後の状況を主に検討したい。

まず社会主義リアリズムとは何か、その概念規定を明確にする。次に、社会主義リアリズムがどのようにして中国に移入されたか、毛沢東『延安文芸座談会での講話』(1943年・1953年修正、文芸講話)と社会主義リアリズムの関係、建国後の社会主義リアリズム導入の画期をなす中国文学芸術工作者第二次代表大会(1953年、第二次文代会)の状況、社会主義リアリズム導入の結果生まれたとされる人民文学・人民文芸と呼ばれる作品群の性格、前近代に創作された中国古典文学や外国文学の解釈の変化、胡風批判、反右派闘争などの1950年代批判運動と社会主義リアリズムの関係、1958年から提唱される「革命的リアリズムと革命的ロマン主義の結合」と社会主義リアリズムの関係、ソ連の影響と中国の民族性の葛藤、などを考察する。最後に、21世紀の今日からみた中国での社会主義リアリズム導入やそれが生み出した作品群の性格・今日的意義を検討したい。